

はじめに～短歌・天皇・沖縄

沖縄、天皇に関して、2016～17年重大な局面を迎えた。沖縄については、辺野古新基地建設承認取消裁判での県の敗訴、工事再開。北部訓練場一部返還に伴う高江ヘリパッド完成、基地機能強化。オスプレイ墜落、飛行再開、空中給油再開へと現実に向き合った。天皇・天皇制については、昨年8月「生前退位」表明がなされ、政府は、有識者会議を立ち上げ、特例法対応への地ならしが先行している。沖縄の基地問題、日本国憲法下の象徴天皇制が問われるチャンスであったが、その流れにはない。

なぜ、天皇制に関心を持ったか。日本の戦前の検閲制度を調べていく中で、治安維持法・出版法などによる言論弾圧は、「安寧秩序を乱す／天皇への不敬」が口実になった。占領下のGHQによる検閲は、原爆／天皇崇拜／民族主義／米兵犯罪などへの言及は削除とする厳しいものだったが、天皇の戦争責任は不問とした。当事者は、戦前・占領期の検閲実態をあまり語らないが、日中戦争下の『出版警察報』などの極秘資料だった官庁出版物やプランゲ文庫による研究は進んできた。独立後は、表現の自由が保障されたか。昭和天皇の闘病・死去時に展開された「自粛」騒動、平成期は、天皇制の呪縛から一見解放されているよう方向性の中で、天皇の名における文化勲章はじめ褒章制度が拡充・多様化した。軍事研究への財政支援に見られるような科学技術・文芸への国家的関与が進行している。一方、国家の安全、テロや組織犯罪対策を口実にした特別秘密保護法や「共謀罪」新設などによる監視や言論統制の強化がなされている。

短歌の世界では、歌会始の選者というシステムも、歌人の選別、差別化による「統制」＝「自主規制」を助長していないか。

1. 天皇の沖縄の短歌は、多く「鎮魂」の短歌であって、その限界は

1) 主題の限定～基地問題には言及しない～「鎮魂」の歌（14首／25首）

その他、自然・風物・文化1、2、4、7、11、12、19、20、22、23、24（11首／25首）

2) 天皇・皇后の短歌が公表されるのはどんなときか～元旦と歌会始、非公開の月次（つきなみ）歌会その他の短歌は、民間の歌集等の出版による。

3) 沖縄にかかわる「おことば」と相まって

1975年7月17日「ひめゆりの塔事件」当日の夜の談話

1993年4月23日 天皇即位後初めての沖縄訪問時の挨拶

1996年12月19日 63歳の誕生日会見

2002年12月19日 誕生日会見 1972年5月15日復帰の日から30年

2003年12月18日 誕生日会見 歌謡集、植物、組踊など……。沖縄経済の厳しさ

2004年12月23日 誕生日会見 首里城など多くの文化財を戦争の痛手で失う、国立劇場の完成の喜び

2015年8月15日 全国戦没者追悼式における天皇の「おことば」

4) 天皇の短歌の役割と限界

憲法上の制約、政治活動の禁止を前提に政府の政策の欠落・失政・失策への弥縫策、情緒的補完機能

2. 天皇の短歌やメッセージを沖縄の歌人たちはどう受け止めたか

1) 歌会始への応募などから

・見わたせば甘蔗のをばなの出そろひて雲海のごとく島をおほへり（宮国泰誠）入選（1970年「花」）

・慰霊の日の摩文仁の丘の岩陰にさびさびとして昼顔の咲く（国吉有慶）佳作（1970年「花」）

・沖縄の与那原みちのふる泉みづ清かりき今もあらむか（飯田秀真）（千葉県東庄町）入選（1955年「泉」）

*1955年からの沖縄人権侵害キャンペーン始まる

2) 「オキナワに詠む歌—百人の沖縄・アンソロジー」（『歌壇』2015年6月）から

・日本人(きみ)たちの祈りは要らない君たちは沖縄(ここ)には来るな日本(そこ)で祈りなさい

・日本人(きみ)たちは沖縄(ここ)に住むな君たちに住まれたら沖縄(ここ)が消え果ててしまう（中里幸伸）

3) 平山良明「選者の眼 VS 投稿者—タイムズ歌壇平成 28 年 12 月こぼれた短歌」(特集・沖縄を詠む『現代短歌』2017 年 2 月) から

- ・累々たる差別の極み天皇メッセージ高江の森に警官の継ぐ(當間實光 1943 年～)

4) 『沖縄文学全集第三巻・短歌』(国書刊行会 1996 年 6 月) から

- ・天皇のお言葉のみで沖縄の戦後終はらぬと勇気持て言ふ(大城勲 1939 年～)
- ・戦争の責めただされず裕仁の長さ昭和もついに終わりぬ(神里義弘 1926 年～)
- ・天皇は安保廃棄基地撤去を宣言してから沖縄へ来られよ(国吉真哲 1900 年～)
- ・警備陣万余到りておどろおどろ島に黑影あまたに揺らぐ(新里スエ 1934 年～)
- ・国体旗並ぶ街道囚はれの如く島人に警備の続く(玉城洋子 1944 年～)

5) 新城貞夫『花明かり』(1979 年 11 月)

- ・おのが視野のアジア昏れゆき行き南海に没せし父よ撃て天皇を(新城貞夫 1938 年～、サイパン生れ)
- ・くれないの肉裂くまで柘榴熟る父よアキヒトを刺してもいいか(〃)
- ・南海に没せし父の夕焼けよ生き延びさせて天皇います(〃)

3. 本土の歌人は沖縄の歌人の短歌をどのように受け止めたか

- ・中野菊夫(1911～2001『樹木』)「祖国への声」『短歌』1955 年 4 月ほか

- ・吉田漱(1922～2001『未来』)「二つの日本を訴える」『短歌研究』1958 年 3 月
沖縄での言論統制が厳しい中、本土での沖縄の現状と沖縄の歌人の作品の紹介に努めた。

- ・渡英子(1952～『短歌人』、歌集『琉球—レキオ』(2005 年) 評論集『詩歌の琉球』(2008 年)
「沖縄の人戸風土と歌」(インタビュー)(『短歌往来』2006 年 7 月)における発言

「私達離れた者から見ると、基地の反対とかそういうことばかりニュースに出ますけれども、実際にはそこで働いて生活をしている人が沢山いて、それによってある程度経済が回ってる部分がある。(中略) 辺野古も結局名護が最後には OK を出しましたでしょ。あれも結局はそういうことなんです。私達外から見ると何故受け入れるんだって思うんですけど。それを含めてやっぱり沖縄ってまだ貧しさがあるんですね。」

- ・小高賢(1944～2014『かりん』)「歌の弱さと強さ」(『短歌往来』2013 年 8 月)の発言

「誤解を招くことを承知のうで言うならば、沖縄にとって自明の固有性(文化、戦争体験、基地問題への怒り)が、逆に、ずれを生んでいるのではないか(もちろんこれは沖縄だけの問題ではない。沖縄以外の読み手の想像力不足・認識不足も指摘しなければ不公平だ)。これらは越えられない落差なのだろうか」と問題提起をし、「逆説的だが、背負っている環境から一度離れてみることでないか、と思う。言い換えれば、個により執し、自分を突き詰める。つまり、沖縄という旗印から、意識的に距離をとる試み(忘れるということではない)である」と評した。さらに、近年の歌集を例に、「沖縄という衣装(意匠)からどこか自由でない印象を受けるのだ。沖縄はこだわらざるを得ないことは理解しつつ、作品を生み出すく個>が取り込んでく沖縄>に溶け込んでしまっている読後感を否定できないのだ。作品と作者を取り替え可能性といってもいい。作者の世界が意外と立ちあがってこない」(注:下線部分のような留保が多い)

- ・松村正直(1970～『塔』)「短歌月評・沖縄戦 70 年」(『毎日新聞』2015 年 5 月 25 日)の発言

「自らの主張をただ述べただけの歌も多い。〈政府の蛮行〉〈大和の犠牲〉〈権力の横暴〉といった言葉が入ると、どうしても歌は硬直化し、スローガンになってしまう。今回のアンソロジーは沖縄出身者の社会詠でほぼ占められているが、もっと多様な視点があっても良いだろう。例えばそこに、俵万智、松村由利子、光森裕樹といった沖縄移住者の歌を加える柔軟さも大切だと思う」

(これらに添えて)

- ・屋良健一郎(1983～『心の花』、琉球新報「琉球歌壇」選者)

「沖縄は特別か」(『心の花』2013 年 10 月)の発言

「(小高は)沖縄歌人の作品は、スローガンの、類型的という、幾度となく指摘されてきた基地詠の表現上の課題を(私を含め)克服できていないものも多いが、(中略)おそらく多くの人が感じていながら口に出来なかった沖縄との隔たりを率直に指摘」した。

- ・屋良健一郎「沖縄短歌の現状と課題」(『心の花』2014年6月)の発言
「沖縄の作者の歌は漠然とく基地>やくオスプレイ>を詠むに留まって(中略)現場であるはずの「現場性」が乏しい。・・・小高が指摘するく身体に届く読み方がほしい>は卓見である」
- ・屋良健一郎による選歌「全国秀歌集」(『現代短歌』2016年1月)「一年間に総合誌に発表された県内在住者の歌から作品本意に選んだ。戦争・基地を詠む歌が多かったが、く秀歌>はどれだけあったろう」10首の内4首が、俵万智、光森裕樹、松村由利子、佐藤モニカという本土出身の歌人の作品であった
- ・屋良健一郎「論壇・短歌の中のく米軍基地>訴える表現のヒントに」(『琉球新報』2016年9月1日)
スローガンや新聞の見出しのような、どれも似たような基地の歌のなかで佐藤モニカの「横長に灰色のフェンス続きみて終はりさうでまだ終はらぬ話」など「声高に基地反対を叫ぶのではないが、静かに訴えてくるものがある」
- ・屋良健一郎「佐藤モニカの沖縄詠」『うた新聞』2017年1月
- ・名嘉真恵美子(1950～)「今、沖縄で考えることと表現」『短歌往来』2013年8月
沖縄の短歌(主に反戦歌や基地詠)は自分たちでもよくわからないながら、く類型>やくナマ>という評言を受け入れてきた。作歌の現状は萎縮し、高く歌い上げるような強いひびきの歌が減った。
- ・玉城洋子(1944～)「沖縄の現実と詠うアイデンティティ」『短歌往来』2013年8月
日本国の沖縄への眼差しは冷酷なもので、歴史の中で見て来た「琉球」「沖縄」への構造的差別がある沖縄の現実、沖縄戦を引き継ぐ「米軍基地」の「命どう宝」を掲げ、時事詠を多く詠む。

4. 歌会始・天皇・天皇制に関する近年のリベラルな論者たちの論調の特色

- 天皇の短歌と一連の「おことば」とをあわせ読み、「リベラルな」人たちからの現天皇称揚の傾向が浮上。
- ・矢部宏治(1960～)『戦争をしない国—明仁天皇メッセージ』(小学館 2015年7月)
「象徴天皇という大きな制約のもと、折にふれて発信される明仁天皇の考え抜かれたメッセージ。その根底にあるのはく平和国家・日本>という強い思いです」と絶賛する論者もいるんです(『日本はなぜ基地と原発を止められないのか』集英社 2014年10月、がある)。
- ・金子兜太(1919～) また、東京新聞で昨年から連載している「平和の俳句」という企画があり、読者から俳句を募集して、いとうせいこうと金子兜太の選により、毎日一句が掲載されている。今年の「昭和の日」「昭和天皇誕生日」の4月29日、金子兜太選による「老陛下平和を願ひ幾旅路」(伊藤貴代美 七四才 東京都)が掲載され、その選評には、「く金子兜太>天皇ご夫妻には頭が下がる。戦争責任を御身をもって償おうとして、南方の激戦地への訪問を繰り返しておられる。好戦派、恥を知れ。」とあった。
- ・日本共産党の対応として、
 - ①2016年1月から、敗戦後天皇が出席する国会開会式への不参加から参加へ
 - ②2016年1月から、歌会始選者今野寿美を赤旗歌壇に起用
- ・吉川宏志(1969～『塔』)内野によるシンポ批判から天皇制・歌会始批判へ反論として「うた新聞」8月号、10月号に掲載

私の、それらへの反論として

- ・「戦後70年—ふたつの言説は何を語るのか」(『女性展望』2015年11/12月合併)
- 昨二〇一五年、戦後七〇年ということで、「安倍談話」と八月一五日全国戦没者追悼式における天皇の「おことば」との対比で「おことば」への評価に対する危惧
- ・時評『ポトナム』(2016年7月号)、「吉川氏に答える」(『うた新聞』9月号、11月号)
- ・「タブーのない短歌の世界を〜「歌会始」を通して考える」(『ユリイカ』2016年8月)

最後に

目取真俊(1960～)、1997年「水滴」芥川賞、不敬文学としての「平和通りと名付けられた街を歩いて」(1986年『新沖縄文学』連載、2003年初期短編小説集に収録)の視点と2014年以降、新基地建設への抗議活動の継続、2016年4月1日海上抗議活動中拘束・逮捕・釈放とその後。小説家としての実践に着目。

沖繩を詠んだ昭和天皇の短歌

1967年(歌会始「魚」) *1921年3月の皇太子時代、欧州旅行時に立ち寄った折の思い出

①わが船にとびあがりこし飛魚をさきはひとしき船を航きつつ

1972年(松山国民体育大会)

②沖繩の人もまじりていさましく広場をすすむすがたうれしき

1981年(桃華楽堂にて沖繩の民謡と無用を見る七月二十九日)

③沖繩の昔のてぶり子供らはしらべにあはせたくみにをどる

1987年

④思はざる病となりぬ沖繩をたずねて果たさむつとめありしを

出典:『おほうなはら・昭和天皇御製集』(読売新聞社 1990年10月)

沖繩を詠んだ天皇・皇后(皇太子・皇太子妃)短歌一覧

*太字は、鎮魂の歌

1971年(鳥)

①いつの日か訪ひませといふ鳥の子ら文はニライの海を越え来し(美智子皇太子妃)『瀨音』

1972年(五月十五日沖繩復歸す)

②黒潮の低きとよみに新世の島なりと告ぐ霧笛鳴りしと(美智子皇太子妃)『瀨音』

③雨激しくそそぐ摩文仁の岡の辺に傷つきしものあまりに多く(美智子皇太子妃)『瀨音』

④この夜半を子らの眠りも運びつつデイゴ咲きつぐ島還り来ぬ(美智子皇太子妃)『瀨音』

1975年・七六年(沖繩県摩文仁)

⑤戦ひに幾多の命を奪ひたる井戸への道に木生ひ茂る(明仁皇太子)『ともしび』

⑥ふさかいゆる木草めぐる戦跡くり返し返し思ひかけて(明仁皇太子)『ともしび』

⑦今帰仁の城門の内入れば、咲きやる桜花紅に染めて(明仁皇太子)『ともしび』

1976年(歌会始「坂」)

⑧みそとせの歴史流れたり摩文仁(まぶに)の坂平らけき世に思ふ命たふとし(明仁皇太子)

⑨いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のぼりゆく(美智子皇太子妃)

1976年(伊江島の琉歌歌碑)

⑩ ^{フルガ ヌルチタケ} 広がゆる畑 ^{タチユルグスクヤマ} 立ちゆる城山 ^{チムヌシヌバラヌ} 肝ぬ忍ばらぬ ^{イクサヌヌトウ} 戦世ぬ事 (明仁皇太子)

1980年(歌会始「桜」)

⑪四年にもはや近づきぬ今帰仁(なきじん)のあかき桜の花を見しより(明仁皇太子)

1984年(歌会始「緑」)

⑫種々(くさぐさ)の生命(いのち)守り来し西表(いりおもて)の島は緑に満ちて立ちたり(明仁皇太子)

1993年(沖繩平和祈念堂前)

⑬激しかりし戦場(いくさば)の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ(天皇)『道』

1993年(沖繩県植樹祭)

⑭ ^{ニルツクモニニガテスリ} 弥勒世よ願て揃りたる人 ^{タルフイトク} たと戦場の跡に ^{アトクニマツク} 松よ植ゑたん(天皇)『道』

1994年(歌会始「波」)

⑮波なぎしこの平らぎの礎と君らしづもる若夏(うりずん)の島(皇后)

1995年(平和の礎)

⑯沖繩のいくさに失せし人の名をあまねく刻み碑は並み立てり(天皇)『道』

1995年（礎）

⑬クファデーサーの苗木添ひ立つ幾千の礎(いしじ)は重く死者の名を負ふ（皇后）『瀬音』

1997年（対馬丸見出さる）

⑭疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされにけり（天皇）『道』

2004年（宮古島）

⑮さたうきびの高く伸びたる穂を見つつ畑連なる島の道行く（天皇）

2004年（南静園に入所者を訪ふ）

⑯時じくのゆうなの蕾活けられて南静園の昼の穂(おだ)しさ（皇后）

2012年（元旦発表、沖縄県訪問）

⑰弾を避けあだんの陰にかくれしとふ戦(いくさ)の日々思ひ島の道行く（天皇）

⑱ちゅら海よ願て糸満の海にみーばいとたまん小魚放ち（天皇）

2012年（元旦発表、旅先にて）

⑲工場の門の柱も対をなすシーサーを置いてここは沖縄(ウチナー)（皇后）

2013年（歌会始「立」）

⑳万座毛に昔をしのび巡り行けば彼方(あがた)恩納岳さやに立ちたり（天皇）

2014年（元旦発表、学童疎開船対馬丸）

㉑我もまた近き齡(よわひ)にありしかば沁みて悲しく対馬丸思ふ（皇后）

出典：皇太子夫妻歌集『ともしび』（婦人画報社 一九八六年一二月）、皇后歌集『瀬音』（大東出版社 一九九七年四月）、天皇在位10年記念『道』（NHK出版 一九九九年一〇月）、天皇在位20年記念『道』（NHK出版 二〇〇九年九月）『皇后美智子さま全御歌』（新潮社 二〇一四年一〇月）他。歌集には、未発表の月次歌会作品も収録。「歌会始」の作品は年号のあとにお題と共に示した。他は翌年の元旦発表の作品など宮内庁ホームページによる。

参考：『天皇陛下と沖縄』（日本会議事業センター 明成社 二〇一二年二月）

天皇夫妻の短歌公表の場：元旦、歌会始、各県持ち回り行事（植樹祭・豊かな海づくり大会・国民体育大会）

明仁天皇・美智子皇后沖縄訪問一覧 *1～5は、皇太子・妃時代

	年月	主な目的	その他の訪問先
1	1975・7・17～19	19日沖縄国際海洋博開会式	ひめゆりの塔（火炎瓶事件）ほか慰霊碑、愛楽園
2	1976・1・17～18	沖縄海洋博閉会式	伊江島（4・29琉歌碑建立）今帰仁城跡等
3	1983・7・12～13	19回献血運動推進全国大会	国立戦没者墓苑、平和祈念堂、ひめゆりの塔など
4	1987・10・24～25	42回国民体育大会（「おことば」代読）	国立戦没者墓苑、平和祈念堂など
5	1987・11・12～15	23回全国障害者スポーツ大会	国立戦没者墓苑、首里城跡など
6	1993・4・23～26	44回全国植樹祭	国立戦没者墓苑、平和祈念堂、ひめゆりの塔・資料館、特養名護厚生園
7	1995・8・2	戦後50年慰霊の旅（特別の挨拶）	平和祈念堂、国立戦没者墓苑、平和の礎
8	2004・1・23～27	国立劇場おきなわ開場記念公演	平和祈念堂、国立戦没者墓苑、宮古島南静園、石垣島水産試験場
9	2012・11・17～20	32回全国豊かな海づくり大会	平和祈念堂、国立戦没者墓苑、障がい者施設ソフィア、万座毛、久米島
10	2014・6・26～27	「対馬丸」犠牲者慰霊	平和祈念堂、国立戦没者墓苑、対馬丸記念館、小桜の塔

世論調査

① 沖縄県民の天皇観

◇NHK 放送文化研究所世論調査『放送研究と調査』2012年7月発表

天皇は尊敬すべき存在かくそう思う>

沖縄県 51% (82年:41%、87年:45%、92年:34%、02年:30%)

全国 72%

◇県民意識調査『琉球新報』2017年1月1日発表

天皇・皇室に親しみをもっていますかく強く持っている> <まあ持っている>

9.1+31.7 = 40.8%

② 沖縄米軍基地と経済

◇NHK 放送文化研究所世論調査『放送研究と調査』2012年7月発表

沖縄県 沖縄に米軍基地があることは、あなたの暮らしや仕事に役立っていると思うか

<大きく役立っている・どちらかといえば、役立っている> 6.4+22.4= 28.8%

<どちらかといえば役立っていない・全然や役立っていない> 68.7%

全国 沖縄に米軍基地があることは、沖縄の人たちの暮らしや仕事に役立っていると思うか

<大きく役立っている・どちらかといえば、役立っている> 15.0+52.4= 67.4%

<どちらかといえば役立っていない・全然や役立っていない> 25.1%

辺野古新基地埋立承認をめぐる訴訟の動き

(2013・12・27 仲井真知事辺野古沿岸部埋め立て承認)

2014・1・15 名護市久志地区住民承認取消を求めて県を提訴

(2014・11・16 翁長知事当選)

(2015・10・13 翁長知事埋め立て承認取消)

2015・10・20 宜野湾市民、県の承認取消無効を求めて提訴

11・17 国が県の承認取消を違法として取消撤回を求めて代執行訴訟を提訴

12・24 名護市辺野古住民、承認取消処分の執行停止を求めて国を提訴

12・25 県が国の埋立承認取消無効を違法として提訴

2016・3・4 国が県の承認撤回を求める代執行訴訟において工事中止・再協議を条件に和解成立。3・23 協議開始

3・7 和解に基づき国が知事の承認取消の撤回を求める是正勧告

6・17 係争委は国の是正指示が違法かを判断せず、議論を集結。「国と地方のあるべき立場が乖離している」と国・県の協議続行勧告

7・22 是正勧告に従わない知事を違法として国が提訴

9・16 福岡高裁(那覇支部)、県の辺野古移転承認取消を違法として、国勝訴判決。9・23 県上告

12・20 最高裁判決で、国勝訴判決(県の埋め立て取消撤回)